

令和 2 年 5 月 30 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02521

研究課題名(和文) フィッツジェラルド文学から読み解く人種と結婚のポリティクス

研究課題名(英文) Race and Marriage in the Works of F. Scott Fitzgerald

研究代表者

高橋 美知子 (Takahashi, Michiko)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：90389388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、スコット・フィッツジェラルドの作品にアメリカ社会におけるホワイトネスの複雑さや伝統的婚姻制度への疑念が描きこまれていること、フィッツジェラルドが一貫して、社会の中心からわずかに外れたところで生きるマイノリティ/弱者の生を描こうとする姿勢を持っていることを指摘した。

また、スコットの妻ゼルダに関する研究では、これまで研究の対象とされてこなかった短編小説の研究を進め、それらが単なるスケッチではなく、一貫したテーマを持ち、精読に耐えうる作品であることを示すとともに、夫からの経済的自立を目指していたという従来のゼルダ像の読み直しを行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、アメリカ文学のキャンソンの一角を形成する作家であるスコット・フィッツジェラルドの作品における非メインストリームの人々に着目することで、彼の作品に現代社会で問われている性/生の多様性の受容を先取りする側面があることを示した。

また、長らく真剣に検討されてこなかったスコットの妻ゼルダの執筆活動に注目し、テキストの精読を行なった本研究は、アメリカ文学史の空白を埋めることに寄与するであろう。本研究において提示された新たなゼルダ像は、これまで定説化してきたゼルダ像に一石を投じるものであると同時に、スコット研究や1970年代のフェミニズムの検証にも影響を与えるはずである。

研究成果の概要(英文)： This project is intended to illuminate that the works of F. Scott Fitzgerald depict the complexity of whiteness in American society as well as questions for traditional marriage system, and that they are depicted as closely related. It is also shown that Fitzgerald constantly portrayed people who live in the arenas which are slightly off-centered in society.

The project also conducted intensive researches on Zelda Fitzgerald, the wife of Scott. Through a careful reading of her neglected writings, this project proves that they are not mere "sketches" (as they have long been believed) but the stories with coherent themes that are worthy of serious reading. The outcome of this project sheds new light on her, correcting the long-accepted view of her as a woman whose desire to have her own career and independence was denied by her husband, tragically driving her insane.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：スコット・フィッツジェラルド ゼルダ・フィッツジェラルド 結婚 女性と仕事 人種

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

スコット・フィッツジェラルドの *Tender Is the Night* には、女性を抑圧するシステムとしての伝統的婚姻制度の転覆や、「性的家族イコール自然」というメタナラティブからの離脱が描かれており、同時に伝統的婚姻制度への異議申し立ては、常に人種的相克というテンションの中で描かれている。フィッツジェラルド作品において、婚姻表象と人種表象は不可分に絡み合っており、二つを切り離すことは不可能だという認識を今回の研究課題の出発点とし、フィッツジェラルドが自身の作品において多様化する生/性の在り方を描いている視点から、その作品を分析することを目指した。

生/性の多様化という言説が市民権を得るはるか以前に、人気作家として文壇や社交界の中心にいた男性作家であるフィッツジェラルドがそのような視点を持っていたとすれば、そこには彼自身の出自が関係してこよう。アイヴィーリーグ出身の人気作家としてのキャリアを積みつつも、彼はアイリッシュ・カトリック、すなわち決してアメリカのメインストリームではない出自を持っていたのである。よって、本研究では作品研究に加え、作者自身のエスニック・アイデンティティを含めた、伝記的事実の再調査も重要であると考えた。

2. 研究の目的

スコット・フィッツジェラルドの作品に描かれる伝統的婚姻制度の行方とその背景に存在する人種の相克の相関性を明らかにすることを目的とした。また、フィッツジェラルドが残した個人的記録(手紙や日記、出納簿など)を精査し、彼のエスニック・アイデンティティはいかなるものであったか、そしてそれが彼の人生や作品にどのような影響を及ぼしたかを調査することも目指した。

3. 研究の方法

中心となったのは作品と個人的記録のテキスト研究、および伝記の精査である。2016年度には、*Tender Is the Night* における人種と婚姻関係の関係性を研究した。2017年度には、*The Great Gatsby* に描かれる婚姻関係の研究を、特にこれまであまり論じられていないウィルソン夫妻を中心に行った。また、スコット・フィッツジェラルドの故郷であるミネソタ州セントポールにおいて現地調査を行ない、当地の人種構成や彼の成育歴などについて有益な情報を得ることができた。この年の研究活動を通じて、スコットの妻であるゼルダが彼の人生と作品に及ぼした影響の大きさを改めて認識し、スコット研究と並行してゼルダ研究にも着手し、先行研究が極めて少ないゼルダ作品の精読を始めた。2018年には、前年に着手した *The Great Gatsby* 論に引き続き取り組んだ。白人労働者階級であるウィルソン夫妻と、有閑階級のブキャナン夫妻の対比が両者の居住地を通じて鮮明に描かれていることに注目し、ニューヨークを中心としたアメリカにおける都市形成の歴史についてのリサーチも集中的に行った。並行してゼルダ作品のテキスト研究を進め、その成果を2019年に共著として出版した。また、ゼルダに関する伝記類の精査、ゼルダの書簡類の精読を行なった。

4. 研究成果

Tender Is the Night では伝統的婚姻関係からの逸脱が人種の相克の中で描かれているが、特にエリートでありながらメインストリームのアメリカ白人にはなりきれない、アイルランド系アメリカ人主人公ディック・ダイヴァーの曖昧な白人性が、作中に幾重にも表象されていること、ディックが最終的には婚姻制度から抜け出すことで、非メインストリームの生き方を手にした可能性があることを、二つの論考(「ダーク・ラヴァー、ホワイト・ガール 『夜はやさし』における人種と性」、『ホワイトネスとアメリカ文学』収録、2016)と(「婚姻制度を超えて 『夜はやさし』のオルタナティブな読みの可能性」、2017)において論じた。

The Great Gatsby に関する研究では、デージー・ビュキャナンやジェイ・ギャッツビーの人種についての研究はこれまでも十分に行われていることから、先行研究が少ないウィルソン夫妻に注目した。夫妻は白人でありながら、同じ白人であるトム・ビュキャナンから徹底的に搾取される存在として描かれており、ディックと同様アメリカ社会におけるホワイトネスの複雑さを浮き彫りにする存在である。一見白人として一括りに出来そうなトム、ウィルソン夫妻、そしてギャッツビーの間に横たわる埋めようのない格差が、作中の地理的表象に投影されていることに注目し、*The Great Gatsby* を資本主義の発展により格差が固定化し、郊外化により階層の分断が進むアメリカ社会を描写したテキストとして分析した成果を、2018年度の日本英文学会九州支部のアメリカ文学部門シンポジウムにおいて、「ウィルソン夫妻と灰の谷 都市と郊外の狭間を読む」として発表した。

当初の計画にはなかったことであるが、フィッツジェラルド作品における婚姻表象の研究を進めるうちに、スコット自身の結婚生活、すなわち彼の妻ゼルダが彼の人生や作品に及ぼした影響を考察する必要性を認識するようになった。二人の婚姻生活がトラブル続きであったことはよく知られており、二人は嫉妬しい、互いの才能を潰しあった加害者/被害者としての構図で語られてきた。しかし、前述したようにスコットの作品にマイノリティ/弱者の生を描こうとするまなざしが一貫して存在することを考慮すると、スコットは本当に、(これまでしばしばそう言われてきたように)ゼルダが妻であり、女性であるからという理由で彼女のキャリア形成を阻んだのだろうかという疑問を覚えるようになった。また、既婚白人女性の就労率がわずかに一桁台

という時代に、ゼルダが本当に仕事をすることでスコットからの自立を模索していたのかという疑問も生れた。ゼルダの執筆活動に関する研究が殆どなされてないことも判明したことから、2017年からゼルダ研究に着手した。特にほとんど先行研究がない短編小説を中心として研究を進め、その成果を二回の口頭発表（「ハッピー・エンドの向こうに ゼルダ・フィッツジェラルドの短編を読む」日本F. スコット・フィッツジェラルド協会、2017、および「ゼルダ・フィッツジェラルドの短編における結末の諸相」日本F. スコット・フィッツジェラルド協会、2019）、そして論考「ゼルダ・フィッツジェラルドの決定不可能なテキスト 「百万長者の娘」のモダニズム性」（『アメリカン・モダニズムと大衆文学』収録、2019）として公表した。ゼルダの作品分析の際には、作中の婚姻表象と女性の就労の描かれ方に着目した。

今回行ったゼルダの執筆活動に関する研究により、これまで国内外で生じていたゼルダ研究の空白を埋めることに貢献できたと考えている。また、今回の研究を通じて、これまで定着していたゼルダ像、すなわち夫からの独立を望み、自身のキャリアを築くことを願いながらも、夫や周囲の男性からの妨害により精神を病んだ悲劇の女性、という人物像に再考の必要性があることを指摘できた。短編小説や書簡の精読を行なった結果、ゼルダは女性が仕事を持つことの重要性を認識しつつも、家庭生活を犠牲にして仕事を優先することについては懐疑的であり、本質的には可能な範囲で仕事をし、目の前の人生を大切に生きようとする堅実で柔軟な姿勢を持っていたと考えられるからである。この研究成果は、2019年の口頭発表で報告したのち論文化した（現在投稿中）。

ゼルダに関する研究の過程で、スコットがゼルダの代わりに作品を書いたという事実はない一方、ゼルダの執筆活動について概ね協力的であったこと、ゼルダの作品の多くが彼の名を冠して発表されたにもかかわらず、私的記録の中でスコットが一貫して彼女を自分とは別の独立した作家として扱っていたことなどが判明した。ゼルダの執筆活動に否定的だったというスコット像についてもまた、再検討の余地があるだろう。スコット作品における婚姻表象の研究が出発点であったが、ゼルダ作品における婚姻表象、さらにはゼルダの人物像の見直しまで、射程が大いに広がった4年間であった。今回の研究成果を踏まえ、従来のフィッツジェラルド夫妻をめぐる言説を再検討するとともに、両者の対立構造を前景化するような言説が形成されてきた背景の調査を、今後の研究課題のひとつとしたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高橋 美知子	4. 巻 1
2. 論文標題 ハッピー・エンドの向こうに ゼルダ・フィッツジェラルドの短編を読む	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フィッツジェラルド研究2017	6. 最初と最後の頁 22-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 美知子	4. 巻 16
2. 論文標題 婚姻制度を超えて 『夜はやさし』のオルタナティブな読みの可能性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 福岡大学研究部論集：人文科学編	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋 美知子
2. 発表標題 ゼルダ・フィッツジェラルドの短編における結末の諸相
3. 学会等名 日本F.スコット・フィッツジェラルド協会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋 美知子
2. 発表標題 ウィルソン夫妻と灰の谷 都市と郊外の狭間を読む
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋 美知子
2. 発表標題 ハッピー・エンドの向こうに ゼルダ・フィッツジェラルドの短編を読む
3. 学会等名 日本F.スコット・フィッツジェラルド協会全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋 美知子
2. 発表標題 ウィルソン夫妻と灰の谷
3. 学会等名 福岡アメリカ小説研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 藤野功一編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 291
3. 書名 アメリカン・モダニズムと大衆文学	

1. 著者名 安河内英光・田部井孝次編	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開文社	5. 総ページ数 356
3. 書名 ホワイトネスとアメリカ文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----